

P-035 肺内リンパ球増殖性疾患の3例

自治医科大学 外科学講座 呼吸器外科部門

長谷川 剛, 遠藤 俊輔, 佐藤 幸夫, 齋藤 紀子, 大谷 真一,
手塚 憲志, 手塚 康裕, 塚田 博, 蘇原 泰則

【目的】肺原発のリンパ球増殖性疾患は、肺癌取り扱い規約（第6版）においてWHO分類に準拠し、(1)リンパ組織性間質性肺炎、(2)結節性リンパ組織過形成、(3)低悪性度辺縁帯B細胞リンパ腫に分類された。最近肺癌を疑って胸腔鏡下生検を行った3症例でこの種の疾患を経験した。症例を提示し概念の整理と臨床的な問題点の検討を行った。【症例1】58歳女性、健診で左肺に異常陰影を指摘された。胸腔鏡手術を施行、術中迅速診断でリンパ球の集塊を認めるが悪性所見なしとのコメントであったので、部分切除で手術を終了した。術後病理診断でBALT lymphomaと診断され、外来にて経過観察中である。【症例2】44歳女性、健診で胸部異常陰影を指摘された。左肺下葉のGGO病変で経過観察するも無変化であったため胸腔鏡手術を行った。病変が3cm強であったため底区域切除術を行った。術中迅速診断ではリンパ増殖性疾患とのことであった。術後病理診断はLIPであった。【症例3】52歳男性、健診で右中肺野に腫瘤状陰影を指摘され紹介、胸腔鏡手術を行った。小腫瘍が中葉に散在しており、胸腔鏡下中葉切除術を行った。術後の病理診断では多発性のpseudolymphomaを最も疑うがBALT lymphomaも否定できなかった。現在外来経過観察中である。

【考察】経験した3例とも術前の画像診断で肺癌との鑑別は困難であった。肺内のリンパ球増殖性疾患は、用語の整理が不十分と思われる。術中迅速診断では正確な診断は困難であるため、術式の選択、経過観察方針などに関してさらなる検討が必要である。